

伊豆大島の旅 2018



2018年9月

旅のチカラ研究所 植木圭二

私の高校時代は、仲間たちと結構色々なことに挑戦していた。そして当時の高校生も今や還暦を過ぎており、その仲間たちと初秋の伊豆大島を巡ってきた。伊豆大島の魅力である海、山、歴史、温泉、グルメを青春時代に戻った気分で堪能してきたので、その旅を紹介する。

■面白い旅の予感

夏の暑さも残る9月の3連休、私は竹芝桟橋から出た伊豆大島行の高速ジェット船の中で隣に座っているおばさんたちに得意な顔で船の説明をしている。この高速ジェット船は米航空宇宙局（NASA）が開発した技術を民間転用したもので、水中翼によって浮上して時速80kmで海面を滑走するので船というよりも飛行機に近い。だから浮上モードになる時は**Take off**というなどといかにも詳しいだろうという話をしている。

それを熱心に聞いているのは私が高校時代にやっていたサークルの仲間である。

そのサークルは当時としては珍しい市内の高校をまたいだ自主的な集まりで、男子校だった私にとっては他校それも女子高校生と話をする貴重な機会でもあった。そういうサークル活動は今でも珍しいかもしれない。

今回はそのメンバーを誘ってこの旅を企画したものの、参加したのは元女子高生（JK）の4人と男性は私だけという構成になった。念のため断っておくと、男性参加者が他にいなかったのは偶然である。決して意図的なものでない。

私にとっては伊豆大島への船旅は慣れているが、海なし県の群馬から来た彼女たちにとっては珍しさの連続らしく、船が速いということよりもこんな船があるのかということに驚いている。恐らく大きなフェリーボートのようなものをイメージしていたらしく、車はどうやって積み込むのかなどと質問してくるのが私をとっても新鮮な気持ちにさせてくれる。

そういう新鮮な目で物事を見ないといけないと逆に教えてもらっているような気になる。いつの間にか私の常識が世間からずれているかもしれない。初心に戻れと心に言い聞かせる。

うん、これは面白い旅になりそうだ。45年前の仲間との旅は青春をトレースすることになる予感がする。

■まずは大島一周

船は竹芝桟橋を出航して1時間45分で伊豆大島岡田港に到着する。行く前のLINEのやり取りでは群馬から伊豆大島にその日のうちに着くのかなどと心配していた彼女たちだが、始発電車で出発したものの午前中の早い時間に到着したことに驚いている。

そして元JKたちはというと、潮の香りが良いとか、どの車も品川ナンバーだとか、警視庁のパトカーがあるなどとそれぞれの素直な感想を言い合っている。ここ伊豆大島は東京都大島町なので、当たり前なことなのだが、やはり珍しいのだろう。そういえば私が初めてこの島に来た時にもそんなことに驚いていたことを思い出す。

そして今夜泊まるペンションのオーナーが迎えに来てくれている。

ペンションで一服して、車を借りて“とりあえず大島一周”に出発する。伊豆大島は大島一周道路という一回りするには都合の良い道路があって約50kmの道のりなので道草をしなければ約1時間で島を一周できる。

大島は人口7770人、面積も人口も八丈島をおさえて伊豆諸島で一番である。

都立大島公園に立ち寄り、公園の一角のテーブルに陣取り昼食をとる。陣取るといってもあまり観光客がいないので、ほぼ貸切状態である。緑の絨毯と南国風の木々に囲まれたテーブルで小鳥のさえずりをBGMにそよ風に包まれて食べる昼食は格別だ。おっと、元ではあるがJKにも囲まれていることも付け加えておかなければならない。



食事の内容はというと、先ほど島のスーパーで買った明日葉入りの混ぜご飯だ。これは伊豆大島でなければ食べることがないだろう。明日葉は「今日摘んでも明日芽が出る」という生命力抜群の植物だ、でも寒さには強くない。だから温暖なここ伊豆大島に適しているといえるのだろう。

筆島と呼ばれる筆の先を海に立てたような岩がある。高さ約 30m ということだが展望台から遠いのであまり大きく見えない。先客の若者が一人、それをじっと見ている姿が印象的だった。

波浮の港にやってくる。かつて遠洋漁業の基地として有名で、都はるみの「アンコ樅は恋の花」などにもその頃の隆盛ぶりが歌われている。そういえば以前にこの港に若者を連れてきたが、そもそも都はるみを知らないのです、説明に苦慮したことを思い出す。



そしてもう一つ、波浮の港を有名にしたのは川端康成の「伊豆の踊子」で、この小説は波浮で生まれ育った旅芸人一座が伊豆半島でお座敷回りをしていた時に青年と出会ったという小説である。そんな縁で当時の旅館が保存されていて、踊り子たちが踊る様子を人形で再現している。

私は波浮に来たら、鵜飼商店のコロッケを食べることにしている。その店は旅館通りの奥にありシャッターを下ろしている店が多い中、元気に営業している数少ない店だ。

店番をしているおばあさんにコロッケを注文すると、注文を受けてから揚げてくれるので熱々のコロッケを頂くことができる。

私たちは一個 65 円のコロッケを買って、フーフーとさまして歩きながら食べている。その姿は学校帰りの高校生になっている。



波浮の港から程なくすると地層切断面という名所に来る。ここは道路工事中に大きな地層断面が現れたというもので、島ではバウムクーヘンと呼ばれている。100 層からなる高さ約 30m の大きなバウムクーヘンは 800m ほど続いている。およそ 1 万 5000 年前のものだという。

それを初めて見る彼女たちは興奮を隠せないでいる。

このスケールの大きさは単体でもなかなか凄いと思うが、世界一の太平洋に対峙して威風堂々とそびえ立っている姿が、私には実に頼もしく感動的に感じる。そんな太平洋はというとキラキラ輝いているのだけなのがとても印象的である。



■心地よい風と共に三原山登山

車は大島一周道路から中に入り、三原山の登山口に到着する。三原山は標高 758m で外輪山に囲まれ、真ん中に火口がある。登山口は外輪山の一角にあって標高およそ 500m なので外輪山から一旦下って平原を歩き、また標高差およそ 300m を登ることになる。登山口から火口までゆっくり歩いて 1 時間、御鉢回りの火口一周は 40 分くらいなので、登山は所要約 3 時間になる。

9 月とはいえまだまだ神奈川では 30℃ の気温だが、ここ伊豆大島は少し涼しい。更に標高が高いのでちょうど良い気温になっている。

心地よい山風が吹き抜ける、いや海が近いので海風かもしれない。ここは海に浮かぶ山なので、どちらも正解で伊豆大島三原山ならではの風なのだろう。

道は火山岩が砕けた軽石のような黒い石や砂でできているが、そんなに歩きにくくはない。もともと行程の半分以上は道路が舗装されているので、この舗装部分は単なるウォーキングになり登山というものではない。

元 JK たちは歩きながらでもとにかくよくしゃべる。エネルギーの半分は口につぎ込んでいるかのようで、大丈夫なのかと心配するが、しゃべっている間は元気なのだろう。

それでも頂上に近づくにつれて彼女たちの口数が減ってくる。還暦を越えたこの年になると個人差もあるが高低差 300m の登山はそう楽なものではない。それでもお互いを励まし合って登る姿は青春を共にした仲間のチームワークだろう。

高校生の時にサークルでハイキングや軽登山をした思い出がよぎってくる。まさしく青春をトレースしている。

45 年前の思い出にふけている間に何とか頂上に到着する。外輪山の向こうに見える海をみて一同、よく頑張って登って来たねとお互いをたたえる姿はいかにも中高年の登山らしい。

頂上にある三原神社に参拝する。神社というより祠（ほこら）という感じだが、この旅の安全を祈願する。祈願と言えば、この近くに噴火でできた奇岩（きがん）がある。この形がゴジラに似ているので写真スポットになっている、ちょっと有名なゴジラ岩だ。



三原山の火口は今でも噴煙が出ており、熱気も伝わってくる。火口の中のマグマが噴出した穴を火孔と呼ぶが、この火孔は直径 300m、深さ 200m の大きな穴で一大パノラマになっている。

それは人間の領域を超えた壮大で神秘的なものになっている。それもそのはず 1984 年の映画「ゴジラ」の中でゴジラは噴火中のこの火孔に落ちて行方不明で終わる。

うん、行方不明？ 亡くなったことにすると次回作ができないからか。



彼女たちは少し疲れていそうなので火口一周を誘うのを躊躇していたが、そのうちに彼女たちから是非一周したいと言ってくる。火口を回り反対側に行くと外輪山との間に裏砂漠が広がっていることを事前に伝えていたからだろう。

その伝えた内容というのは、国土地理院の地図で「砂漠」という表記があるのは日本ではただ一つ、この伊豆大島にしかない。

砂漠と言えば鳥取砂丘を思い浮かべる人が多いが、鳥取砂丘は砂漠ではない。言うなれば単なる砂浜である。

こんなことを書くと申し訳ないが実際に鳥取に行って感じることは、カメラマンは実に上手くこの砂浜を撮影しているということだ。こんな砂浜をあんなにダイナミックな風景に表現できるとは恐れ入ってしまう。対してこの伊豆大島の砂漠は本物だ。国土地理院のお墨付きがある。

火口の淵を歩いて行くと、左に火口、右に砂漠が広がる。砂漠の向こうには外輪山があって、その向こうは海が見える。海の向こうには利島もうっすらと見ることができる。この景色はそうは体験できないだろう。



山の上なので風がヒンヤリとしている。外輪山のところで感じた風とは明らかに違う。それは海からやって来た風が山の頂上まで上昇して直接あたるからだろう。

山に風が登ると温度が下がる。ちょうどフェーン現象と逆の現象になる。100m 上がる毎に0.6°C下がるので、5°Cくらいは海辺よりも低くなる。だから海の風がここ三原山頂上まで来ると冷たい風になる。

そしていつの間にか私たちの影もだいぶ長くなってきた。

■お勧めの大島温泉

一人の脱落者も無く、チームワーク良く三原山を征服した私たちが下山してすぐに向かったのは大島温泉ホテルの温泉である。

温泉評価委員会（通称：おひょい）を主事する私にとっても 10 本の指に入るお勧めの温泉だ。その理由は露天風呂からは三原山の雄姿を見ることができる絶好のロケーションにある。泉質は単純泉ながら若干の硫黄臭がして、湯船の温度も程よいところが私の好きなところでもある。



隣の女湯からはキャッキヤと話声が聞こえてくる。言っている内容は分からないが、恐らくあの山に登って来たのよ、よく頑張ったね、登山の後の温泉は最高などと言っているのに違いない。私の方は一人でのんびりと夕暮れの三原山を見ながら、温泉を堪能することにしよう。

このホテルは私たちが乗ってきた船の運航をしている東海汽船が経営している。私はその東海汽船の株主なので実は格安で泊まれるのだが、今回は麓にある宿を選んだ。理由はもちろん海に近いこととそのペンションの魅力からだ。

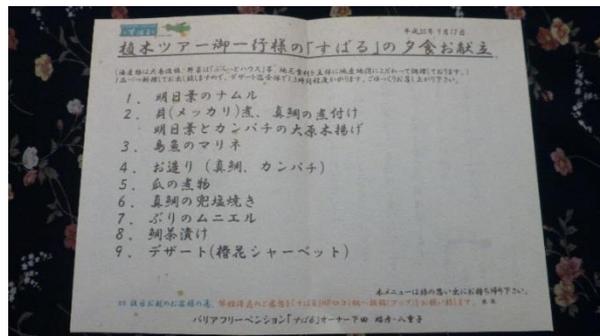
株主優待を上手く利用すると格安の旅が実現できることが多い。ついでに書くと復興や町興しのために各自治体の補助金制度もあり、これを使わない手はない。

■ペンション「すばる」に感激

その海に近いペンション「すばる」に宿をとった。伊豆大島で評判 No.1 のペンションでバリアフリー、芝生の庭が印象的な宿だ。

このペンションと私は 10 年くらい前からの付き合いで、定期的に花壇作りに来ている。その夜は近所の方々と一緒にお好み焼きパーティーをして島の人たちと交流をすることになっている。もちろんお好み焼きは私が焼いているのだが、新婚時代に大阪勤務の経験が功を奏している。

本日はお好み焼きではなく、このペンションの評判の料理をご馳走になる。地元産の明日葉や魚が食材になる。料理は温かいものは温かいうちに、冷たいものは冷たいうちに頂くのが基本で、コース料理のように食べ終わった頃を見計らってオーナーが一品一品持ってきてくれる。その時のオーナートークもまた面白い。オーナープレゼンテーションというのもペンション評価の一つになっている。



元JK、そして現在は主婦の彼女たちにも、この料理そしてオーナートークも大変好評だったようで絶賛の嵐のように言葉が飛び交っている。恐らく彼女たちが今まで泊まった旅館やホテルでは体験していないものなのだろう。これだけ喜んでもらうとオーナーだけでなく、私まで嬉しくなってしまう。

夕食が終わり、まだまだ話し足りないようでオーナー夫妻が就寝した後も、宴は延々深夜まで続く。本日はオーナーが気を利かせてくれて他のお客を取らずに貸切状態にしてくれたのも大変ありがたい。

翌朝は庭に出て、外で朝食を頂く。

庭の一角の木陰の下に大きな木製のテーブルであり、そのテーブルが朝食の食卓になって料理が並び始めている。朝陽が木漏れ日となって料理にそそいでいる。

私たちの目線の先には庭に広がる芝生があり、その先にはフェニックスの木々がある。その枝や葉が朝のそよ風になびいている光景がたまらなく良い。そのさわやかで、のんびりした感じが何とも言えない。至福の時間というのはこういう時間なのだろう。

焼きたてのパンが出てくる。このペンションでは朝食の時間に合わせて毎朝パンを焼いてくれる。パチパチという音をたてながら食卓に運ばれてきたパンは如何にも美味しそう。外側は少しカリッとしていて中身はフワァと柔らかい。そのバランスが絶妙で、焼きたてだからこそ味わうことができる食感だろう。



■元JKたちは土産が好き

ペンションのオリジナルの商品で椿の花びらジャムがある。伊豆大島と言えば椿ということで、たくさん生息している椿の花びらを使ってジャムができないかとオーナー夫妻が試行錯誤して作ったもので、今ではいろいろなところから注文が多いという。

朝食で出てきたこのジャムを彼女たちが気に入って、ペンションのホールの隅にある土産物コーナーを物色している。そのジャムに始まり、椿油のドレッシングや島醤油も既に標的になっているようだ。

島醤油とは醤油に青唐がらし漬け込んでピリ辛の醤油に仕上げているものだ。島ではワサビが育たないので、刺身などを食べるのにワサビに相当するものとして島醤油ができたらしい。

この辛さ加減が彼女たちに好まれている。昨夜の夕食にも出てきて、食べ方も作り方も教えてもらっているので実に目ざとい。

この島醤油で浸け込んだ白身魚の刺身を「べっこう」と呼び、「べっこう丼」や「べっこう寿司」というものを島内の多くの食堂で食べさせてくれる。

道の駅のような農産物直売所「ぶらっとハウス」に立ち寄る。そしてここでも彼女たちは土産を買っている。特に島醤油にするために青唐辛子をたくさん買っている。そして明日葉蕎麦、牛乳煎餅など凄い勢いだ。

出港まで時間があつたので港ターミナル付近で3軒の土産物屋をハシゴする。ここでも伊豆大島で作っている焼酎「御神火」を買い込んでいる。この焼酎は昨晚ペンションで飲んだものの味は調査済みという訳か。麦焼酎なので比較的女性にも飲みやすい。

「くさや」も全員でないが買い込んでいる。ご存知のように「くさや」は新鮮な魚を強烈な匂いのする魚醬液に浸けて天日干しにした保存食品である。好き嫌いがこんなに分かれる食品はない。その評価を知らずながら食べたことないので買うという。これはもう、怖いもの見たさなのだろう。

お土産ついでの話で、弘法浜という海水浴場に立ち寄ると浜に落ちている貝殻を大事そうに手にした元JKがいる。

群馬には海がないが、この貝殻を綺麗に洗って大事そうに持ち帰る彼女の姿に、昔の自分を見ているような気になる。私が大学時代、まだ日本に返還されて間もない沖縄に行つて貝殻を持って帰つてきて部屋に大事に飾っていたことがある。そんな思い出と重なり、まさしく青春時代をトレースしているかのようだ。

付け加えておけば、弘法浜には貝殻取りに行つたのではなく、伊豆大島は火山岩で出来ているので海岸の砂浜が黒いので珍しいだろうと立ち寄つたのである。

砂浜は真っ黒ということではないが昨日の三原山の土の色と同じ色をしている。あのゴジラの岩と同じだ。

夏の終わった海が少し冷たく寂しい感じがするのは、砂の色だけではないだろう。



■ 船で打ち上げ

帰りの船は高速ジェット船ではなく、普通の大型客船を予約した。打ち上げ宴会を船の上でやってしまうという魂胆と、いろいろな船を体験した方が面白いだろうということだが、この意図がズバリ的中したようだ。

船に乗って、私はすかさず後方デッキのオープンスペースにある 8 人が対峙して座れるベンチを確保し、元 JK たちを案内する。

まるで添乗員のようなことをやっていることに気が付く。

それでも悪い気はしない。

通常の添乗員ならば、仕事だからそんなことは当たり前よとお客にあまり感謝されないが、ここでは彼女たちに感謝されっぱなしなのが実に気持ち良い。

人に心から感謝することが、人を動かすことができるという人間関係の極意までもここで感じて勉強させてもらうとは思わなかった。そういうことを青春時代に実感として分かっていたならば私の人生はもっと違っていただかもしれない。



ビールを飲みながら海を眺めての打ち上げは最高だ。つまみを兼ねた昼食にと港の売店で買い込んできた「べっこう寿司」がこれまた旨い。そして酔いも回って打ち上げは必然的に盛り上がる。話題は今回の旅の話から仕事や家族の話などへ移り、45年前にタイムスリップしていく。

何と言っても最高に盛り上がるのは青春真っ盛りだった頃なので恋愛話である。その内容はというと本当は誰が好きだったとか、誰と誰が付き合っていたとか話題は次から次へと湧き出てくる。その度に「エー、本当！、嘘っおー！」とか大歓声が上がる。そうすると周囲の乗客を気にした誰かが「シーー」と制しする。そうこうしているうちに時間は瞬間に過ぎていく。

約4時間の打ち上げは、日差しの強い昼間から夕陽が横から差し込む時間帯を経て東京のビル群が暮れなずむ時間まで船上で海と共に過ごす。その最後のシーンでは夕暮れのまったり感の中で皆がデッキから思い思いに海を眺めている。

やがて船は竹芝栈橋に接岸し、青春をトレースした伊豆大島の旅は幕を閉じる。

■旅の記録

【実施日程】

2018年9月17日(月・祝)～9月18日(火)

【1日目行程】

- ・船便往路(竹芝栈橋発 8:25 ～高速ジェット船～ 伊豆大島着 10:10)
- ・島内車窓観光 約30分(大島空港、サンセットパームビーチ)
- ・ペンション「すばる」にて休憩打ち合わせ 約30分
- ・伊豆大島一周 約3時間(大島ゴルフ場、大島公園、昼食、筆島、波浮港、
鶴飼商店でコロッケ、踊り子の里資料館、地層切断面)
- ・三原山登山 約3時間(2013年伊豆大島豪雨災害跡を車窓見学、登山)
- ・大島温泉ホテル日帰り入浴 約1時間
- ・ペンション「すばる」着 18:30

【2日目行程】

- ・ペンション「すばる」発 10:30
- ・島内を車で散策約2時間(農産物直売所ぶらっとハウス、弘法浜、源為朝の館跡)
- ・船便復路(伊豆大島発 13:20 ～大型客船で昼食打ち上げ～ 竹芝栈橋着 17:40)

【費用】

一人当たり 19798 円。2 万円を切ることができた理由は株主優待と東京都補助事業しまぼ通過を利用したことによる。以下の内訳は全て一人当たり換算で消費税込み。

- ・交通費 7780 円(高速船 7400 円、大型客船 4570 円で計 11970 円、
東海汽船株主優待券により 35%割引で結果 7780 円)
- ・宿泊費 9800 円(1泊2食付き宿泊費 11880 円、飲み物と土産 2120 円で計 14000 円
東京都補助事業のしまぼ通過使用により 30%割引で結果 9800 円)
- ・1日目昼食 839 円(明日葉混ぜご飯、サラダ、稲荷寿司他、ワイン等)
- ・コロッケ屋 225 円(コロッケ 65 円、お茶等 160 円)
- ・2日目昼食 1154 円(べっこう寿司、ビール、酎ハイ、参加できかった仲間への土産等)